

# 柔道の「五の形」一本目における当身技の術理：柔術的当身技の視点から

志々田文明<sup>1)</sup>、阪口正律<sup>1),2)</sup>、佐藤忠之<sup>3)</sup>、川上泰雄<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>早稲田大学スポーツ科学学術院

<sup>2)</sup>カルガリー大学キネシオロジー学部

<sup>3)</sup>早稲田大学スポーツ科学部

キーワード：嘉納治五郎, 永岡秀一, 富木謙治, 小谷澄之, バイオメカニクス

## 要約

本研究は「当身技とは原理的には投技の延長」とした洞察した富木謙治の理論に依拠して次の三点を課題とした。(1) 嘉納治五郎の五の形一本目についての教えが記された七つの文献の中から小谷澄之と大滝忠夫の文献を技術的に分析する。(2) 一本目と当身技との独自な関係について早くから言及していた富木が伝えた解釈に基づく試演を行なってその映像を技術的またバイオメカニクスの観点から分析する。(3) 両者を総合して柔術における当身技の術理を解明する。明らかになった主な点は以下の通りである。

(1) 小谷・大滝文献(1971)では、掌を柔らかく当てて身体を移動する取が物体化した受に勝つ術理のなかに、嘉納の重視した「柔よく剛を制する」の思想がみられること。

(2) バイオメカニクスの観点から解釈では、初動の掌の押しに続く継続した動きの場面で、間断ない掌の押しによる操作によって受の脚の後方への踏み出しが徐々にしにくくなりその歩幅も次第に狭められてくる理由は、取が掌の親指と小指の力の入れ具合を微妙に調節することで受の胸部の回旋運動が妨げられ、受が歩行という生得的運動の反射に封じ込められている要因によることが示唆された。地蔵倒しの場面では、受が次第に体勢を大きく後傾させるように崩され、地面反力の方向が徐々に前方に移動してくると、取の掌によって受の重心周りに加えられる後方への力のモーメントを受の地面反力による反対方向へのモーメントによって打ち消すことができなくなり、ついには受の重心は後方へ回転して転倒する様相が観察された。これが地蔵倒しに相当するものと考えられる。

(3) 嘉納は力を有効に発揮できる方向に継続して加え続けなければ必ず倒れると教えたのに対して、富木は掌の力が角度を変えながらも当身技のように一点一方向に働いていることに注目してこの形を詳細に分析した。富木の発見は、柔術における当身技の特性を、柔らかく当てた掌とその操作及び身体移動を継続することによって相手を倒すことに見た点にある。それは「触れて当てる→押し崩す→当て倒す」と展開される解釈である。これにより、嘉納の求めた課題である当身技を含めた乱取りが実現する可能性もあると理解された。

スポーツ科学研究, 11, 212-224, 2014年, 受付日: 2014年5月12日, 受理日: 2014年9月17日

連絡先: 志々田文明 〒359-1192 所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学スポーツ科学学術院

fuzanaoi@waseda.jp